〔書　評〕

『魔女狩りの社会史』

――ヨーロッパの内なる悪霊――

ノーマン・コーン著・（山本通訳）　一九八三・七月・（岩波書店刊）

小倉襄二

I

私自身の主な関心は〝福祉史の闇〟ということにある。現在の社会保障の到達した状況をふくめて、それぞれの制度・分野にはとほうもなくひろく深い史的展開の過程がある。人々の〝処過史〟ともいうべき扱いも重視されているが、その経緯には錯綜した想像を絶する事実がひそんでいる。本書の主題である「魔女」の問題も私のいう〝福祉史の闇〟に複雑なかかわりがあるらしい。たとえば、岡田靖雄『差別の論理』―魔女裁判から保安処分へ―（一九七二・四月・勁草書房）によると精神科医療史のなかでとくに「魔女裁判」について詳細な紹介がなされている。わが国の「つきもの持ちの迷信」から入って、西ヨーロッパの魔女裁判と精神障害者への偏見の源をさぐるという関心からの分析となっている。あるいは、浜林正夫『魔女の社会史』（一九七八・三月・未来社）では、英国の社会史との相関のなかで、これは一六〇〇年代の救貧法（Poor Law）の展開と「教区」（Parish）の状況に密着する興味ぶかい魔女迫害についての指摘がある。「隣人関係の崩解、共同体の解体こそが、魔女迫害の原因となったものであり、貧しい未亡人、年老いた女性を魔女にしたてあげることが多かったのは、こういう人びとがもっとも多く共同体から排除されやすかったからである。トレヴァ・ローパーはこの関係をもっと一般化し、社会の転換期に共通の価値体系がくずれて社会的不一致が生じてくると、この不一致をおしつぶそうとしてある特定の人びとや思想がいけにえにしたてあげられる」と述べている。中世の崩解期と本源的蓄積期、英国救貧法史の前段階としての、貧民抑圧の「残虐立法」の展開という福祉史の基本過程にこの魔女

『魔女狩りの社会史』

の主題はよりそった深い暗部として存在したようである。カリタス（宗教慈善）との関係では、一六世紀末のある聖職者は「貧しい人びとにたいして恵みぶかい人は、魔女によって危害を加えられることはない。魔女にたいするもっともキリスト教的な予防法は慈善である」と教えたという。魔女迫害は何十万人という人びとが魔女という〝烙印〟をおされて、拷問、抑圧、処刑されていったのであるが、それは、神と宗教を否定し、神を呪い、冒瀆する、悪魔を信じ、生贄にえをさげ、人肉を食べたり、あらゆる汚穢と性的狂妄に参加し、人々に禍害をもたらすものであった。私たちにとっては、どうしても理解の限界があり、その意味連関がとらえにくい主題であるが単なる猟奇性をこえた社会史の事実として、私自身にとっては〝福祉史の闇〟を探るためにもとくに本書は貴重な資料として読むことができた。

II

訳者あとがきによると本書の著者ノーマン・コーン（Norman Cohn）教授は一九一五年にロンドン生まれ，オックスフォード大学、クライスト・チャーチ・カレッジで研鑽をつみ、現在はサセックス大学で講座を担当する。本書の原題は Europe's Inner Demons であって、「ヨーロッパの内なる悪霊」と訳されている。本書の序文の終りに著者がもっとも端的にその論述の意図を語っている。「―堕落をもたらした張本人、あるいはまた悪の権化として想像されたある種の人間たちを絶滅することによって、この世を浄めようとする衝動―と関係している。社会的な意味関連（コンテキスト）は相異なるが、衝動そのものは疑いもなく同一である。さらに大切なことには、今でも我々はそういう衝動を抱きつづけているのである」と。魔女への迫害のピークは一五・一六・一七世紀にわたるが、そのステレオタイプについての諸説がある。森島恒雄『魔女狩り』（一九七〇・二月・岩波新書）には魔女裁判を中心に詳細な研究がある。一四三一年五月三〇日、ルーアンの広場で異端審問により妖術者、悪魔の祈禱師として殺されたジャンヌ・ダルクの例なども初期の有名な事件である。類書と本書のもっともきわだった相違は、従来いわれてきた魔女とその迫害史において描写されたステレオタイプの根拠に対して徹底した歴史資料の新しい解釈によって批判とステレオタイプの魔女〜魔女迫害の像とはちがった姿をわれわれに教示したことにある。

本書は十二の章によって構成され、二世紀のはるか古代、ローマ帝国の小さなキリスト教徒の共同社会の神聖冒瀆の諸相に魔女迫害の起源をもとめて論述を開始している。二章から三章に中世の異端の悪霊化として中世におけるカトリック教会のさまざまの異端的セクトへの瀆神的、あるいは魔王崇拝、ここでも誠実にキリスト教徒としての敬虔な生活をいとなんでいた人々が異端として、魔女妄想のいけにえになっている事実が証明されている。強大な聖堂騎士団の壊滅の経過にも、この異端、迫害のメカニズムが働いたことの分析も興味ぶかい。何十万人という魔女への迫

害、「魔女狩り」といわれるものは、一六、一七世紀にピークに達するが、コーン教授の関心は、この大迫害へと押しあげくる要因を従来のうけ入れられていた諸説への批判として提示している。一つは、魔女の秘かな社会、集団が実際に存在したという史実、つまり魔女狩りが現実の社会集団、あるいは、宗教的崇拝に直接にかかわったという根拠は全く存在しないこと(第六章)。とくに、ジュール・ミシュレの『魔女』が六四歳の執筆であって幻想的で詩的天分のすべてで描かれた、サバトの情景、乱交と瀆神、悪魔との交歓などによる描写のくりかえし、魔女集団の実在という謬説を固定化したことへの批判として記述されている。あるいは、魔女迫害についての性の問題、とくに中世いらいの性的抑圧、独身主義の修道士、聖職者の女性への恐怖からの妄想という説明(sex-war)についても、超自然的な手法で隣人を害すると信じられた女性にかぎられたこと、大規模の魔女狩りが開始されたときには、魔女は女性にかぎらず、男女両性をふくむ、多様な年齢・身分の階層をふくむ市民をひろくまきこんでいった事情をもつ。フェミニスト的に固着化しがちな発想への批判として提起している。さらに、この部分は、あまりにも、異端審問所(インクイジション)や審問官の手続きや資料の「偽造文書」によって流布されたあやまりについてのテキストの検証による正確な魔女裁判のかたちをしめす箇所である。いずれにしろ魔女狩りが大量虐殺の様相を呈するに至るためには古代―中世いらいの聖・俗の権力が、魔女の集会(サバト)の実在を信じ、また拷問の利用を許容する裁判手続の自由なる行使という二つの条件をみたす必要があったこと。そして、その背景には、さきの浜林正夫氏の『魔女の社会史』の指摘のような抑圧された農民たちの忘我体験(トランス)、奇怪な夢想があった。コーン教授は、儀礼的魔術、反人間的な悪魔崇拝の異端についての伝統的ステレオタイプが再解釈される過程を生々と描いている(十一章)。民衆の想像の中での〝夜の魔女〟そして「悪霊が奴隷から主人公となり、魔術師の秘密の集会は魔女の集会となり、想定された参加者たちは拷問をとおして自分たら自身が魔女集会に出席したと告白させられただけではなく、彼等が集会で会ったと想定される他の人々の名前を告げることをも強制された。だから魔女狩りが生れたのだ」という。クルト・パッヒビッツ『魔女と魔女裁判』(川端豊彦・坂井洲二訳・一九七〇・一月・法政大学出版局)は、本書とはことなった視角での大著であるが、深層体験(コーン教授)にかかわって、魔女妄想(Hexenwahn)、集団妄想としてとらえている。歴史の奥深いところに、さまざまの系譜に色どられた儀礼的魔術(リチュアル・マジック)、あるいは、祭儀的魔術(セレモニアル・マジック)といわれるものがあり、呪文によって、特別の仕事を行うように悪霊を口説き、あるいは駆りたてる目的で悪霊を呼び出す、降霊魔術ともいわれる分野である。魔術師は、悪霊に仕えるものではなく悪霊たちを指揮する者であり、おそらく手のこんだテクニックに精通した専門家(スペシャリスト)であった。さきに悪霊が従僕から主人公に転換することと民衆がサバトに集団参加する状況にかかわって本書はとくにこの儀礼的魔術が数世代のあいだに魔女についての怪奇なステ

『魔女狩りの社会史』

レオタイプの生ずることを助けた経緯を的確に指摘している。ゲーテの『ファウト』のイメージがかさなる場面である。カトリックの教義と異端のかかわりとして、魔女狩りへのはじめての一歩は、伝統的な教会の教義が儀礼的魔術という比較的に見なれない現象に適用されたときに踏み出されたという。これは、類書において、儀礼的魔術と魔女魔術（ウイッチクラフト）と何の関係もないという通説に批判を加えたものである。こうしたところから訳者のあとがきによると、さきにあげたジュール・ミシュレ『魔女』（一九八三・上・下・岩波文庫）、あるいは森島恒雄『魔女狩り』などは本書によってその通説の部分の大幅な書き直しを行わなければ、現在ではもはや通用しないのではないかと指摘されている。

Ⅲ

「魔女狩り」（the great Witch-Hunt）は、福祉史に連関する史実としてのみではなく、私たちの想像力と好奇の想いをかきたてる。しかし、本書にみても、この妄想、ファンタジーのすさまじい容量と社会史としての形成の深さ、ひろがりは恐るべきものである。訳者も訳業の困難さとして述懐している。文化の基質、とくにキリスト教のシステム、教義、その分派の系統の複雑さ、聖と俗の権力行使の葛藤、それに総体としてからみついた魔女妄想の暗く熱い情念の諸相の記述にふしぎさと驚きの連続であった。

今年の夏、妻と訪れたヨーロッパの都市、そこで視たステンドグラスの色光の交錯、巨大な石造りの大穹隆のうすらぐらい空間にそれは散乱していた。私たちの文化、生活空間には存在しないものである。微妙な音響効果も、このステンドグラスの空間をつよめる。それは、神と悪霊の相剋の空間ともいえよう。とくに、ステンド・グラスの朱黒い投映、それは血の飛沫を想わせた。私には本書の開示する魔女狩りの世界にもかようものに思えた。

さきの岡田靖雄『差別の論理』にも指摘があったが、魔女狩りが体制のプレッシュァーの高まりのもとで、それらの集団ないし社会の指導的支配者たちの心の中に生じた恐るべき「妄想」の所産だとしても「この妄言も何度も繰返して唱えられれば真実味を帯びてくる。そして、時代情況と、妄言を唱える人如何によっては、人々は安易に『内なる悪霊』の指令どおりに行動することになる。そうなってしまうと、もはや正常な人が異常者として扱われ、正論が暴力的に圧殺される。そのような事態が起るのを防ぐのは、『自立』した考え方を持った個々人の、日常的な生活の場での不断の警戒と努力以外にはないであろう」（訳者あとがき）このことは、歴史の流血と殺傷の事実としてのアウシュッヴィッツ―ユダヤ人狩り、日本軍部の南京大虐殺、戦時下の非国民狩り、民族差別による抑圧と虐殺の思考にも連動するものと考えられている。本書の描出したものは、聖堂のステンド・グラスのようにその造型と意味の断面の了解さえも、私たちの日常性からはるかの遠景にあり、西欧的なるものに蔽われている。とうてい短絡したとらえ方はこの巨大な事実の前にはできるものではないが〝福祉史の闇〟の一つの開示、あかしとして、あるいは私たちがこの

〝内なる悪霊〟の主題に心惹かれるかぎり本書は尽きることのない探求を触発するものといえよう。

なお、本書の巻末にはきわめて詳細な魔女研究についての文献リストが収録されている。こうしたおびただしい研究書の刊行されていることによっても、この〝魔女狩り〟という史的事実がヨーロッパの精神史、社会、文化、宗教史にとってきわめて重大な意味をもつものとして扱われてきたことを知るのである。

本書を補うものとしてマレ・ジョレス（F. Mallet Joris）による『夜の三つの年齢』（中島公子訳一九七七・二月・白水社）も異色の作品である。ここでは、フランスの三人の魔女の伝記として歴史的記述のみでは捉えきれない魔女の実際の生涯を物語として構成して魔女の魂の語り、証言として扱ったものである。マレ・ジョレスの視点は、魔女へと仕立てあげたもの何であったか、それは、キリスト教社会の分裂崩解を恐れる当時の支配階級の不安と、悪の滅ぼされるのを見ることで簡単に良心の安堵を得ようとする大衆の願望だったという考え方にある。魔女はこうして弾劾された。そして焚刑に処せられた。訳者である中島公子氏の指摘はとくに留意されていい。

それは「魔女とは人間ではなかった。肉体をとった悪、没理性の化身にほかならなかった。……人間中心主義（ヒューマニズム）というものは、人間性を規定するその仕方の如何によって、規定の枠をはずれたものを切り捨てる危険をはらんでいる。われわれ自身この陥穽を完全に免れているかどうか、その問いに答えることはきわめてむずかしい。近代理性の明晰と表裏をなした闇の深さを知ることはわれわれを謙虚にするのであると」。

私のいう福祉史の闇を視ることもこの主題に深くかかわっている。

（1983・12）

『魔女狩りの社会史』